関学アメリカンフットボールと私

武田　建

我が国にアメリカンフットボールが紹介されたのは、1934年（昭和9年）のことです。宣教師ポール・ラッシュとジョージ・マーシャルの二人が、早稲田、明治、立教に来ていたアメリカ国籍の日系二世学生に呼びかけ合同練習を行いました。そして、11月29日、神宮外苑競技場で東京学生連合軍と横浜外人チームが試合をし、学生チームが26対0で勝利したのが、我が国で最初のフットボール試合だと言われています。関西では、1935（昭和10）年に関西大学が、1940年に同志社大学がチームを作り、その年から関西大学リーグが始まりました。

関学にもアメリカン誕生

その翌年の1941年2月に関西学院大学にもアメリカンフットボール部が結成されました。太平洋戦争が始まる直前のことです。関学の先輩たちは関西大学チームの指導を受け、仁川の川原で練習をしたと聞いています。そして、5月に同志社大学と初試合をしましたが、残念ながら0対20で敗れたそうです。

1945年に太平洋戦争が終わりました。関学チームの創設に関わった先輩たちはただちにチームの再建を目ざしました。しかし、その道のりは平坦ではなかったようです。

フットボールを知っているＯＢや現役が不足していました。防具もボールもありません。一方、１９４７年には第１回甲子園ボウルが開催され、２世選手を擁する慶応は関西代表の同志社に圧勝して、「フットボールはこうするのだ」ということを関西勢に見せつけました。

その頃、関学チームに当時日本を占領していた米軍兵士が来て、フットボールを教えてくれたそうです。私自身は会ったことはありませんが、米兵コーチから習ったというプレーを先輩たちがやっているのを見たことがあります。先輩たちは米兵コーチが話す英語を聞き取るのがかなり難しかったのでしょう、ＴＥが短いパスを受け、後ろから走ってくるＲＢにトスするプレーのことを「ファーラド」と呼んでいました。今になって考えるとフォワードパス・ラテラルがそんな具合に聞こえたのだと思います。「ゴーイング・ホスピタル」というプレーもありました。右を突くと見せて、その逆の左に向かって走る一種のカウンタープレーのことです。守備の選手が関学のＴＢの動きに気をとられている時に、反対側から走ってきてブロックされたら、「きっと病院行きね」と言って説明したのでこんな名前がついたのでしょう。英語の関学の復活はまだまだ前途遼遠でした！

日本の国では、太平洋戦争中英語は敵国の言葉として嫌われました。校歌「空の翼」のなかにMastery for Serviceという英語があるので、歌わせて貰えなかったと聞いています。同じ戦時中、アメリカ政府は人類学者のベネディクトに日本文化について研究させ、その成果を「菊と刀」という有名な書物として出版させています。これは、両国政府が「相手を知る」という点で対照的であったことを物語っています。「対戦相手を研究する」という関学フットボールの試合への準備は、アメリカ文化の影響を受けて育ったものだと思います。

それはそれとして、現実に私たちの先輩が米兵からフットボールを教えて貰う時に、どれだけ大きな言葉の障害があったかは想像に難くありません。それでも、先輩たちはフットボールを習おうと、懸命に努力した様子がこうしたプレーの名前から垣間見ることができるのです。

シングル・ウイングバック・フォーメーション

１９４８年４月、文部省の教育改革の流れのなかで、関西学院の旧制中学部は新制高校（今の高等部）に変わりました。その時に豊中、池田、奈良といった旧制中学でタッ

チフットボールをしていた有望選手たちが、橘高紀雄主務のレクルーティングのお陰で続々と関西学院高等部の３年生に編入してきました。多くの読者には分かりにくいでしょうが、それまでの関学の教育システムでは、一番上に３年制の旧制大学があり、その下に３年制の旧制高校にあたる予科があり、その下に５年制の旧制中学があったのです。ですから、多くの旧制中学の生徒にとっては新しい制度の関学高等部に入学するということは、大学の予科に入学するような感覚だったと思います。さらに「ややこしい」ことに、こうして編入してきた高校３年生は高等部在学中に大学チームに属するだけでなく、大学の公式試合に出場することが許されていたのです。

翌１９４９年、関学は初めて関西リーグで優勝し、第４回甲子園ボウルに出場することができました。旧日本軍から帰ってきた松本庄逸主将の温かい人柄とリーダーシップを引き継いだ渡辺年夫主将は、毎日練習の前か後に必ず関学の裏にある階段へチームを連れて行き、全員で走って上がり、降りてはまた上がる厳しい練習を繰り返しました。こうして、温かい雰囲気のなかに厳しさが根づいたと思います。さらに、翌１９５０年には、中・高・大を一つのフットボールファミリーとしてまとめあげた米田満主将のリーダーシップと組織力が、現在まで続く関学フットボールの一貫教育という伝統を作り上げたと思います。

攻撃のシステムは現在の関学チームが多用しているショットガンとよく似たシングル・ウイングというフォーメーションを使っていました。チームのエースであるＴＢ（テイルバック）はＣの真後ろ４ヤード余の深さに、ＦＢはＧの後３ヤードに、ブロッキングバックはＧとＴの間にセットし、ＴＥの外側１ヤードで１ヤード下がったところにＷＢが位置していました。Ｃのスナップは今と違って、ＰＡＴのキックの時のように早いスナップでした。ですから、Ｃはブロックすることは難しかったのでしょう。スナップ専門でした。ボールはほとんどＣの真後ろにいるＴＢにスナップされましたが、ボールを出す角度はプレーごとに微妙に違っていました。また、エンドアラウンドのオープンプレーの時には、ＴＢはボールを持って一度オフタックルの穴に突っ込むように斜め前に向かって進み、それから斜め後方へ下がるようなコースを走っていました。これは関学独特のプレーだったと思います。ＴＢの前を走る他のＲＢもラインからプルしてきたＧも同様なコースを走りました。今と比べると随分単純なフットボールでした。しかし、関学の先輩たちは当時の日本のフットボールのなかで

は、最先端の攻撃をやっていたと思います。現在、関学がライスボウルで3年連続対戦しているオービック・シーガルズが、2点コンバージョンによく使うショットガンからRBがボールを持って中央を突くと見せて、ラインの手前で飛び上がりエンドゾーンにいる味方のレシーバーにボールを投げるプレーは、当時の関学がよく使ったプレーです。

1949年に初出場した甲子園ボウルでは、慶応義塾大学と対戦し、25対7の大差で初制覇をとげることができました。この試合が近づいた頃、関学中学部に来ていたビル・ポーター先生のご依頼で、彼の兄上から現在も私たちが歌い続けているFight on Kwanseiという部歌が届き、このメロディーと英語の歌詞を口ずさみながら甲子園のグラウンドへ足を進めたことを想い出します。当時高校3年生で大学部員だった私は、先輩の四角い学生帽をかぶってベンチに入り、試合のプレー・バイ・プレーの記録を書きとめていました。

翌1950年の甲子園ボウルも慶応との対戦でした。この年の春、関学はTフォーメーションの早稲田と対戦、完全に叩きつぶされました。大きく点差が開いた第ⅣQにはベンチもあきらめムードだったのでしょう、1年生の私を守備の最後列に送り出しました。遠くの方から「これがTフォーメーションか」と見ていたら、一瞬の間に敵のRBが私の目の前まで来ていたのです。「ボールを持っているは誰だ?」と関学の守備が右往左往している間に試合は終わってしまいました。センターが直接QBにボールを手渡すという、まったく新しい攻撃システムの出現です。秋のリーグ戦の間でも、時には仮想早稲田の攻撃をしなくてはなりません。2年生選手は新人の時からスタートメンバーのスターたちです。1軍の練習相手に敵チームの攻撃をするのは昔も今もJVと呼ばれる2軍の担当です。否応なしに非力な私がQBをせざるを得なくなりました。でも、関学チームのなかでTを知っている人は誰もいません。見よう見真似でやったのです。

ところが、東京では慶応が早稲田に逆転勝ちし、甲子園ボウルは前年に引き続き、関学と慶応の対戦となりました。「早稲田でないぞ! Tではないぞ」と関学は意気揚々甲子園に駒を進め、20対6で勝つことができました。

Tフォーメーションってどうやるんだ?

1951年の冬は関学にとって、特にスカウトチームの私にとっては、Tフォーメーションをどうやって稼働させ

るかがオフの課題でした。1年先輩のエースRBの徳永義雄さんのお宅へよくお邪魔して、Tについての文献を読みながら資料を探し求めました。こうして二人だけのフットボール勉強会が始まりました。しかし、読むのと見るのは大違いです。心理学でも認知理論のバンデュラは「百聞は一見にしかず」という立場を強調しました。当時の私もそんな心境でした。本を読んでTのシステムは多少わかっても、QBがセンターのお尻のどこに手を当て、どんな具合にボールをスナップしてもらい、どうやってそのボールを受けるかといった初歩的なポイントは解決されていませんでした。

その春また早稲田と対戦する機会がありました。今度は多少Tのスカウト・オフェンスも上手になっていたので、慣れていたのでしょう。7対6で早稲田に勝つことができました。この試合のちょっとしたハイライトは関学唯一のTD後のPATでボールを蹴ったことでした。キッカーはこの私です。前の年の早稲田との試合でエースランナーの徳永さんがPATでボールを持って走り、タックルされて選手生命を絶たれたのです。当時のPATは走っても、投げても、蹴っても、1点しか貰えないルールでした。私は米田監督にお願いして「走っても、投げても、成功率は50％に満ちません。それならば、私が蹴った方が少しは確率が高いです」と蹴ることをお願いして、毎日練習後ボールを蹴っていたのです。

試合の翌日、徳永邸に早稲田のエースランナー河西さんをお招きしました。前日、関学に破れたとはいえ早稲田も甲子園を諦めているわけではありません。まさかいきなり「早稲田のQBはセンターのお尻のどの辺に、どんな具合に手を置いて、センターはどんな風にボールをスナップするのですか?」とは聞けません。相手も、こちらの質問の意図はある程度わかっているのでしょうが、そこは「軍の秘密」です。なかなか答えは返ってきません。肝心な所は「俺もよくわかんないんだよナ」と東京弁で誤魔化されてしまいました。ことによると河西さんはRBだからQBがどうやってセンターのスナップを取るかといった細かいことはご存じなかったのかもしれません。

春から始めたTのスカウト・オフェンスは2年生になった我々の学年と1年生の混成でした。はじめは1軍の練習台として始めたこのTのチーム、シーズンが進むにつれてなかなかの代物になってきました。QBの肩は弱いし、走るのも遅い。でもRBは結構進むし、それを止めようとすると、TEに短いパスがくるではありませんか。甲子園ボ

ウルの頃は、3年生のスターたちがやるシングルウイングに対して2軍がやるTの比重がかなり上がってきていました。

しかし、監督の評価という点では、まだまだ我々Tの信頼は低かったと思います。第ⅢQで19対0とリードされた時に、局面を打開するためか、やぶれかぶれだったのか、Tの出番が増えてきました。当時はベンチからプレーがくるのでなく、ハドルのなかでQBがプレーを決めていました。私は大阪のアメリカ文化センターにある唯一のフットボールの本で読んだシリーズ・オブ・プレーズという考え方を信じています。同じ動きのプレーを繰り返しながら、さまざまなポイントを攻撃するという考え方です。これはシステムやプレーが変わった今でも大切な作戦の組立て方だと思います。これを多用してなんとか19対14まで追い上げました。第ⅣQも残りが半分を切っていたでしょう。我々Tの組が呼ばれました。今にして思えば私の消極的な言葉がいけなかったと思います。グラウンドへ入る時に、「私たちが進まなかったら、いつでもシングルウイングに代えて下さいよ」と監督に申し上げてしまいました。Tのチームは順調に進んでいましたが、途中でシングルウイングの上級生の組が交代で入ってきました。「やれやれ、良かった」という気持ちと「残念、もっとプレーをしたい」という気持ちもありました。このシリーズでは結局得点できませんでした。残り時間は僅かです。ここは上級生にパスをお願いする以外に手はありません。ダブルリバースからのパスは成功。しかし、あと数ヤードのところでタックルされて試合終了の笛が鳴ってしまいました。

甲子園ボウルが終わると京都で全日本学生とアメリカ軍との試合があるので、立教を中心とした関東学生と関学中心の関西学生が京都で合宿しました。私は仁川の我が家からカメラを片手に立教オフェンスを見学するため京都に日参しました。甲子園に初出場初優勝の立教は気を良くしていたのでしょう。QBの野村さんもRBの中沢さんも私の質問によく答えてくれました。しかし、どうやら甲子園で勝ったからといって、「敵に塩を送ることはない」と思い直したのでしょう。翌日から私を避けるようになりました。

１９５２年には私の1年上のスター選手たちは最上級生になっていました。我々無名選手はもう3年生です。日本のフットボールはシングルウイングからTへ全面的に移行しようとしていました。関学もその流れから取り残されまいとしていたのでしょう。あれだけ上手にやれていた関学のシングルウイングは、過去のフットボールとして捨て去

られようとしていました。

その時から20数年後、私はノートルダム大学のパーシグエン監督から「ファッションと同じで、フットボールの作戦にもサイクルがある。ファッションの世界では10年ごとに同じようなデザインが流行する。だから、自分はこのサイクルを先取りするために、思い切って20年前に流行したウイングTをやろうと思い、今でもウイングTを使っているデルウェア大学のレイモンド監督に教えを請うたのだ」という話を聞きました。後に、レイモンド監督にこのことを尋ねると、「その通り。でも、それは数年前のことで、今でも週に一度電話はあるけど、もう儀式のようなものさ」と話してくれました。

20歳の大学生それも2軍のQBに、フットボールのそんな奥深いことまでわかるはずがありません。監督がおっしゃるならば、もうシングルウイングはないものだと思いました。ただ、私たち下級生はいいけど、シングルウイングに長年慣れ親しみ、二度の学生日本一を獲得した時の中心選手だった最上級生はそれでもいいのだろうかと思いました。しかし、そんなことは監督にも4年生にも言うだけの勇気も、知恵も、判断力も持ち合わせていませんでした。冬の休みの間に、1年上の古川明さんが「ミズリー大学のスプリットT」の本を持ってきて下さいました。攻撃ラインが隣との間隔を開けば、当然守備のラインの間隔は広くなります。そうすれば攻撃ラインは穴をこじ開けるのではなく、ただ相手に当たればはじめから穴は空いているという考えにひかれました。しかし、スプリットTのQBは走る能力が要求されます。でも、私の足は遅く、身体は小さいという致命的な欠点の持ち主でした。

私の心のなかは揺れ動いていました。立教はノートルダムTを使って日本一になりました。少なくとも我々は彼らと対戦してそのシステムを見てきました。立教は良いお手本になると思ったのです。全く見たことのないシステムを手がけるのに比べると、遙かに楽というかやりやすいでしょう。しかし、立教だけのノウハウを対戦チームの我々が持っているとは思えませんでした。今だから告白しますが、立教の知らないフットボールをやりたいという願望のようなものが私の中にあり、どんどんそれが頭を持ち上げてきました。結局ミズリー大学のスプリットTをやることになりました。ラインの間隔が大きくなりました。本の通りの間隔を取ってみると今までやってきたTフォーメーションとは随分ちがいます。練習をやっている間に、ラインの間隔は次第に狭くなり、気持ちばかり開くという妥協

の産物になってしまいました。しかし、決定的な問題は、ＱＢの私がオプションフットボールをする素質に欠けていたことです。私の同級生に奈良高校から来た谷川福三郎がいました。身体も大きく、パスが上手で、走力もありました。私は彼がＴのＱＢに最適だと監督に進言し、また本人にも言っていました。しかし、彼はＱＢだけは絶対嫌だと言って断わられてしまったのです。４年生は我々と同じスプリットＴとシングルウイングの併用でした。攻守兼任が多い当時のフットボールで、２つの異なる攻撃システムを持つことは、非常に難しいことだったと思います。

１９５２年の甲子園ボウルは淋しい結果に終わりました。立教のオークス監督にとっては最後の年で、チームはまさに円熟期にありました。監督を日本一にして本国に返そうという気迫がみなぎっていました。関学にとって、甲子園ボウルで初めて経験する屈辱的な内容でした。スコアこそ０対20でしたが、実力的にはもっと大きな差があったと思います。私が高等部の２年生の時から、フットボールを教え、励まして下さった上級生が甲子園の勝者になれずに卒業していく姿をみて、ただただ申し訳ないという気持ちでした。

シーズンの終わりにこんなことがありました。当時１月３日のライスボウルは神宮（今の国立競技場）で学生の東西オールスター戦でした。東軍に敗れてベンチからすごすごロッカールームへ帰る私のところへ立教のオークス監督が近寄り「ケン、もっとパスを投げろ」と言って下さいました。この言葉が後に私のフットボール哲学となったと思います。

１９５３年は私たちが最上級生です。当然攻撃のシステムはスタートＱＢになる私の責任です。私は立教のシステムをこの２年間スカウトチームとして経験してきました。その長所を生かしながら、私の走力不足をカバーできるという利点に目をつけました。そして、とっくの昔に、丸善にノートルダムＴの本はオーダーしておきました。

このＴの攻め方はＱＢがセンターからボールを貰うと同時に、真っ直ぐ前へ突っ込んでくるＲＢに１回転してボールを渡すのが特徴でした。ＱＢが相手に背中を見せるのですから、守備からは当然ボールが見えなくなります。１回転しますからボールを渡す位置はラインから後ろに下がります。ＲＢはラインにあく穴が見やすいのは当然です。ただ、ＱＢはセンターがボールをスナップする瞬間に動き始めていないと間に合いません。これは私にとっては新しい動きでした。この冬から春にかけて、私は毎晩我が家で母

親の鏡台の前で1回転する練習をしたものです。

ゴールデン・ルーキーたち

この年の新人の多くは米田監督が中学1年生の時から大事に育ててきた新制中学部第一期生でした。後にキャプテンになる木谷直行は1年ながら攻守にすぐ活躍できるラインでした。ＱＢの鈴木智之は投げてよし、走ってよしの近代ＴのＱＢとしてあらゆる能力を持っていました。そして、彼と私の間には池田から来た3年の井上周がいました。米田監督は一番能力があり守備でセイフティを守る鈴木を、あえて攻撃では三番手に置いて、上級生の私たちを使って下さいました。

多士済々の1年生をまとめ、押さえ、チームをリードしてくれたのが、主将の太瀬重信でした。大きな身体で、すごい脚力、どんなに1年生がかかってもびくともしない力の持ち主で、さすがの1年生も彼の言うことは素直に聞きました。副将の熱血漢中川逸良は高等部の相撲部が全国大会に出た時に、相撲部を助けに行った逸材でした。まさに関学パワーランナーの元祖でした。何時の年でもそうでしょうが、学生スポーツで主将、副将、最上級生のリーダーシップは実に大きな力を持っていると思います。

１９５３年の甲子園ボウルは3度目の立教との対戦でした。7対7の膠着状態を脱しようとしていた後半、立教陣内に攻め込みましたが、私にパスを投げる勇気がなくて手詰まりとなり、敵陣35ヤードあたりでもパントを選択しました。敵陣内に入ってからのパントは私がキッカーですからベンチから交代選手はきません。ハドルのなかで左のサイドラインに蹴り出すと言ったものの、スクリメージにつくと、角度的に難しいと感じました。大声で「真っ直ぐ蹴るぞ」と叫んでゴロのパントを蹴りました。幸運にも立教のゴール前でボールが止まりました。次の立教の攻撃をパントに追いやり、1年生の木谷がキックをブロックしてたちまちタッチダウンに結びつけました。最終スコアは19対7。ＲＢ中川が３ＴＤの大活躍でした。

大学院生コーチ

１９５４年3月に私は文学部社会事業学科を卒業、恩師の薦めで大学院に進学しました。福祉の大学院は文部省の開設認可が下りず、教育の大学院で教育心理学を専攻することになりました。しかし、中学部のタッチフットボール

のコーチと大学で米田監督のお手伝いという二足の草鞋を履いた上、大学院の勉強ですから、振り返るとどれも中途半端だったと思います。コーチとして一番欠けていたのが、基本練習のノウハウを知らなかったことです。「フットボールは紙の上に画いたプレーではなく、ブロックとタックルだ」とアメリカのコーチは言います。そういう基本を教える知識と技術を持たなければ良いコーチングはできないと思います。

１９５４年の甲子園ボウルは、４度目の関学と立教の顔合わせとなりました。主将は米田先生の実弟米田豊でした。下馬評では圧倒的に立教有利でしたが、前半の終わりに関学は清家智光の甲子園ボウル史上最初のフィールドゴールで３点をリードしました。３年下の彼と一緒にゴールキックを練習してきた私にとっては嬉しい先取得点でした。後半いったん逆転されましたが、エースランナーに育った長手功の大活躍によって15対７で逃げ切りました。

１９５５年の甲子園ボウルは日本大学との間で繰り広げられた大熱戦でした。春の交流戦では６対18で敗けましたが、余りその敗戦を真剣に受け止めていなかったのかもしれません。日大独特の右アンバランスといってタックルを右側に二人並べるラインは強力で、人数が一人多い利点を生かして二人がかりで当たってくるかと思えば、一人少ないサイドを横から当たるトラッププレーで前進してくるのでした。

この年の主将は平岡敏彦でした。甲子園ボウルでも春と同じように日大のラインプレーで進まれて、関学はつねに後手、後手にまわってしまいました。大藤努がいくつかの独走をしてくれたお陰でなんとか１ＴＤ差で食い下がっていましたが、残りは僅かを残すのみ。ここでＱＢ鈴木智之からＴＥ西村一朗へのロングパスでやっと同点に追いついた時にタイムアップで敗戦を免れました。この日大のアンバランスＴには私がヘッドコーチになっても悩まされ、最後はアメリカのＮＦＬでコーチをしていた友人からアドバイスを貰って対策を講ずるまで、関学にとっては頭痛の種でした。

留学

１９５６年６月に、私は関西学院を通して北米の教会から２年間の奨学金が与えられ、カナダのトロント大学大学院へ社会福祉の勉強に行くことになりました。私は恩師竹内愛二先生の母校であるオハイオ州の大学に行きたいと

思っていたのですが、アウターブリッジ院長からお呼びがかかり、「武田さん、トロント大学へゆきましょう。いい大学です」という一言でカナダ行きが決りました。院長室に行くと、すでにトロント大学の入学願書が取り寄せられていて、院長自ら願書をタイプライターで書き上げて下さったのです。院長はご退職後トロントの隣街のハミルトンにお移りになるので、関学からの留学生が近くにいて欲しいという隠された願望がおありだったのかもしれません。私も留学中機会をみつけてハミルトンの教会を訪れたものです。

カナダの大学にもフットボール・チームはあるし、プロ・リーグもあります。しかし、カナダのフットボールはカナディアン・フットボールといってバックスがＱＢを含めて５名、三つのダウン、ダウンフィールドブロック禁止、ＲＢのモーションは前でも後ろでも何人動いてもＯＫ、フィールドはラグビー場だから長くて広いものでした。エンドゾーンは馬鹿でかい。三つのダウンしかなければ、10ヤードを獲得するにはパスかオープンプレーです。私のパス重視攻撃のもう一つの原因はカナダのフットボールだったかもしれません。

この年の甲子園ボウルは負けることはないという自信がありました。すでに紹介した木谷直行が主将、鈴木智之のＱＢに代表されるように中学部からフットボール一筋組の最終学年だったからです。母親からの手紙と新聞記事の切り抜きで33対０のスコアを見て、もっと点数がはいってもよかったのにと思ったというのが正直なところでした。私が心配だったのは彼らが卒業した後のことでした。案の定、その後関学は甲子園８連敗という苦しい時代を迎えるのでした。

トロント大学からミシガン州立大学の大学院へ移った留学生活は忙しい毎日でした。授業も大変でしたが、アメリカの博士課程では単位をいくつ集めるかは問題ではなくて、入学後数年すると総合試験というのが待っているのです。私はカウンセリング心理学が専攻でしたからカウンセリングを含む臨床心理学について連続８時間の試験と、心理学全般についてこれまた８時間の試験という二つの大きな関門が待っていました。これに通らないと博士論文の計画書を提出することすらできない仕組みになっています。幸いトロント大学時代からずっと一緒に勉強してきた親友がいたので、彼と予想問題と回答を作り、お互いに試験をやりあって準備しました。

ミシガン州立大学では、練習こそ見学できませんでした

が、試合は全部見に行きました。オハイオ州立大学をはじめ、ミシガン大学、ノートルダム大学、南カリフォルニア大学といった強豪チームが目の前で試合をしてくれるのです。私にとってはこんな素晴らしいフットボールの教材はありません。もちろん、コーチを訪ね、練習を見学し、選手のミーティングに出られればいいのですが、そんなことは無理というものです。スタンドから試合を見るだけでも、当時のカレッジの攻撃をおおざっぱながら勉強することができました。博士論文を提出して学位が貰えることになりました。もうここでの勉強は終り！　大学の書籍部に行って、売っているフットボールの本を全部買い込みました。そのなかでも、ミシガン州立大学のドーティー監督のフットボールの基礎練習の本とスタンフォード大学のカーティス監督のパス攻撃の本は米田監督のもとで、コーチをする上で非常に役に立ちました。

6年ぶりの日本

１９６２年の８月下旬、私は６年３ヶ月ぶりで日本へ帰ってきました。今では考えられないでしょうが、その頃日本人は円をドルに換えることができない時代でした。したがって、私は簡単に日本に帰ってくることはできなかったのです。帰国後直ぐに倉吉で合宿している米田先生とチームを木谷君と一緒に訪ねました。正直なところ、米国の大学フットボールを見慣れた目からすると、関学チームは「か細く」見えて、これで大丈夫だろうか？　という不安が頭を持ち上げてきました。でも、スポーツの試合というのは、こちらがどんなに強くても、相手がもっと強ければ勝つことができません。逆に、こちらに力がなくても、相手がもっと弱ければ勝つことができます。関学がどうしても勝てなかった日大という相手をまず見ないことには対策も立てられないと思いました。

幸い上京する機会があり、日大の試合を見に行きました。とにかく、大きく、強く、早く、そして篠竹幹夫監督は恐ろしく怖い人だということが分かりました。こんなチームと甲子園でがっぷり四つに組んだら、百にひとつの勝ち目もないと思いました。

米田先生の許可をいただいて、思い切ってポジションの変更を実施しました。要するに、パスを受けて走れる選手を捜して、レシーバーに持っていこうとしたのです。密かに用意したのは、当時プロタイプとアメリカでも呼ばれていた、二人のＷＲを左右に広げたフォーメーションです。

パスのコースはスタンフォード大学のカーティス監督の本のなかから、ＱＢの梅田一夫が投げやすいものを選びました。ＷＲが斜めにはいってくるスラント、縦に走るフェイド、短いフック、ＴＥへのクイックパスとフラットといった、タイミングの早いパスで、ラインの負担をできるだけ減らそうとしました。私のやり方を必ずしも全ての選手が喜んだわけではなかったと思います。きっと、キャプテンの斉藤敏宏は私と選手の間の板挟みになったことでしょう。

１９６２年の甲子園ボウルの相手は当然日大でした。前半、日大が見たことも聞いたこともないような、プロタイプからのパスが面白いように決まりリードしました。しかし、後半になると力の差がはっきりと現れました。でも、小さく、弱い、関学が第Ⅳ Ｑの終わりまでリードしていたのです。しかし、終わってみれば関学24対28日大というスコアでした。「善戦しても、勝たなければゼロと同じだ」と思う私と、「パスを上手に使えば日大に対抗することができる」と思う私が、自分の頭のなかで交錯していました。

１９６３年の甲子園では、パスだけでなく、オプションフットボールも入れた攻撃にしました。主将は伊藤忠男でした。ＱＢの梅田一夫の負傷は痛かったですが、大学院時代にコーチした中学部でずば抜けたＱＢだった勝田鐐二が怪我から復帰してきました。彼と一緒にフットボールができる嬉しさがありました。日大は関学のパスを警戒しているので、昨年のようにパス一辺倒では勝負になりません。かといって、パワープレーで日大の守備ラインを突破することは誰が考えても無理な話でした。私は怪我もちの勝田にボールを持って走らせるのは避けたいと思っていましたが、彼はオプションをやりましょうと言ったのです。多分、私の苦しい心の内を察してくれたのだと思います。パスとオプションで第Ⅳ Ｑに18対14と逆転しました。しかし、日大はショットガンという奥の手を出し、再逆転され甲子園制覇の願いはかないませんでした。関学18対30日大。この年は、私がチームの全ての責任を担っていました。敗れたコーチは自らを解任しました。

１９６５年の甲子園ボウルは関学対立教の顔合わせでした。コーチでない私はスタンドから応援していました。前半のリードで久しぶりに甲子園での勝利が近づいたと喜んだのがいけなかったのでしょうか、結果は関学22対22立教で引き分けに終わりました。そして、この試合を最後に米田先生が監督を引退なさることを表明されました。関学のフットボールを常に日本一を目指すチームに育てて下さったのは、米田監督のお人柄と熱心なご指導のお陰だと思い

ます。

宣教師コーチ誕生

米田さんの後任はどうなるのだ？　と思っていたら、私に白羽の矢が飛んできました。私はマネジメントができる人間ではないので、学生時代から親しくしていただいた徳永義雄さんが監督としてチームの運営をして下さるならば、フットボールの現場は担当しましょうと申し上げないといけない情況に追い込まれてしまいました。

私はフットボールのコーチングは勉強の世界と同じだと思っています。何も準備しないで急に研究論文は書けません、良い講義をすることもできません。ところが、準備期間もなしに、急にヘッドコーチになれと言われてしまったのです。１９６２年にアメリカから帰ってきた時には、北米で見ていたフットボールとパスに関して全米一と言われるカーティス監督の虎の巻きがありました。しかし、今回は突然のことでしたし、何の準備もしていない時の指名でした。

春の練習が始まった頃、仁川の私たちの住むアパートにトム・ハリスという一人のアメリカ人が訪ねてきました。仁川で内科医院を開業しているチームドクターの杉本公允先生を受診したら、とにかく「タケダ」を訪ねろと言われたというのです。話を聞くと、４月から関学の商学部へ英語の教師として赴任してくる宣教師だと言います。ミシガン州の西にあるホープカレッジでガードとラインバッカーをやっていたそうです。攻撃のラインとラインバッカー・コーチ発見です。翌日からグラウンドに来て、自分でダミーに当たってブロックのやり方を見せて教えてくれます。授業が始まる頃には、一家で宣教師館に移ってきてくれました。奥さんのバーバラとピーターとポールそしてやがて生まれたキム。我々の子どもと同じ年齢です。日曜日には練習が終わると宣教師館の庭でチームドクターの杉本家、コーチの木谷家の子どもも加わって、怪獣ごっこを楽しみました。いつも、私がゴジラでした。

ハリス・コーチの指導もむなしく、１９６６年の甲子園は関学12対40日大という惨敗に終わりました。ところがハリス先生と私は、お正月に当時東西学生オールスター戦のライスボウルの監督とコーチの役が回ってきました。甲子園で大敗した関学中心の関西が、大勝した日大に関東の精鋭が加わった東軍とどうやって戦えというのでしょう？　守備のことはハリス先生に任せて、私は攻撃を考えること

にしました。どうせ力では勝てる相手ではないと開き直った心境です。当時日大は6対2の8メン・フロントでした。そうだ、西軍はTEを2人、WBないしWRを2人、どうせ走っても大して進まないならばRBは一人でいい。作戦というより「やけっぱち」でした。

パスのコースは極めて簡単。東軍が6人の守備ラインを第一線に並べ、2人だけのラインバッカーならレシーバーのカバーは難しいだろう。もちろん、相手は8メン・フロントであるから、こちらもQBを守るのが困難です。そこでパスを投げないサイドのTEは、ラインに残ってプロテクションを助けることにしました。当然、ライン上に残ってブロックしているTEの反対側へパスを投げることが多くなります。でも、これはオールスター戦です。今回だけ、1回かぎりのことだ。たまには、一人のレシーバーにフックやアウトを投げるようにしよう。実に、簡単なゲームプランでした。

負けてもともという気楽さも幸いしたのでしょう。パスを投げまくっているうちに、西軍リードで前半が終わってしまいました。後半、東軍は我々のパスを警戒してくるに違いありません。そうしたら、パスと見せてRBを走らせよう。関学のパサー奥井捷弘以外に他大学の走れるQBも連れてきていました。この程度のゲームプランでしたが、あれよ、あれよという間に試合が終わってしまいました。大番狂わせ……西軍の勝利でした。ポストシーズンの顔見せ興業的なオールスター戦です。しかし、関東に勝てたということは、私たちには一大朗報でした。頭を使えば、作戦を練れば、練習をすれば「やれるかもしれない」という希望と勇気を与えられた一戦でした。勝った瞬間一番会いたかったのは徳永監督の片腕としてチームをマネージしてくれた主務の森下征夫でした。彼も私の気持ちを察してくれたのでしょう、スタンドからグランドへ飛び降りて走ってきてくれました。

勉強の仕入れにアメリカへ

1967年はハリス先生の最後の年であることは分かっていました。その前に、私は夏からデトロイトへ1年間勉強に行くことになっていました。ですから、春の間にチームを仕上げなければという焦りがあったと思います。春の日大戦、日大主体の西宮ボウルは危ないながら勝つことができて、少しばかり自信をつけたチームを徳永監督とハリス・コーチに預けて一家をあげて出発しました。

関西学院大学の教員として恥ずかしくない授業をやり、学会誌に研究成果を発表し、専門書を書き、なおかつチームを日本一にすることなんか無茶な話だと思います。そこで、私は良い授業をやり、強いチームを作るという二つのことに集中することにしました。そして、数年に1回アメリカに行かせてもらい、その期間は寝食もフットボールも忘れてとは言いませんが、とにかく自分の分野の勉強に専念することにしたのです。デトロイトは私が大学院時代に1年間フルタイムのインターンをしたところであり、毎週2回、3人の臨床指導者が1対1で個人指導をしてくれるという信じられないほど、レベルの高い臨床訓練を与えてくれました。この1年間で私の臨床的な理解がかなり上がったように思います。また、この訓練期間中、私は初めて動物実験から生まれた理論を、臨床というか実践に応用しようとする学派の人たちと交わり影響を受けました。そして、その後その分野の内外の研究者や臨床家と交流するようになりました。そして、行動アプローチでは世界のトップと呼ばれるフィラデルフィアのウォルピやミシガン大学のトーマスといった巨人から直接教えてもらう機会に恵まれたのです。こうして教えてもらったことを、小出しにしながら、勉強の方はなんとかアリバイを作り、フットボールにうつつを抜かしていても、学部内で大きな問題にならずに定年を迎えることができたと思います。

１９６７年に関学はやっと学生王者に返り咲きました。徳永監督とハリス先生の力、キャプテン瀧悠紀夫のリーダーシップ、副将遠藤秀治以下選手のがんばりが結集されたのでした。徳永さんからきた試合経過を書いた長い手紙を読みながら、一人ひとりの選手の顔を思い浮かべながら彼らのプレーをデトロイトの仮住まいで想像していました。徳永さんとの文通は何も甲子園ボウルのことだけではありません。毎日の練習や試合のこと、選手一人ひとりのことまで細かく書いて送ってきて下さいました。私もＴＶで見るプロや大学の試合のことやそれから得たヒントをはじめ、さまざまな情報を送りました。私の汚い手書きの手紙について、徳永さんは「苦労するが、みな読めたよ」と言って笑って下さったことを想い出します。

１９６８年、私たち家族は一年ぶりに帰国しました。デトロイト滞在中に川向いにあるカナダのウインザー大学が社会福祉の大学院を立ち上げるので、はじめの数年だけでもいいから来て欲しいという勧誘を受ましたが、即座にお断りしました。私にとってはどんな条件を持ってこられても関学フットボールをコーチすること以上に大きな魅力は

ありませんでした。

１９６８年、日本に帰ると、関学は春の明治戦に０対22で惨敗していたことを知らされました。８ミリのフィルムで繰り返しその試合を見ました。それは見るも無惨な関学の姿でした。ハリス先生はもういません。しかし、前の年のキャプテンだった瀧が５年生コーチとして残ってくれました。明治のオプションプレーを止めるのは彼に「お願い！」でした。関学の攻撃ラインは明治を圧倒する力はありませんが、レシーバーは竹田彰夫、安部井湧助、松村敬、野木伸二たちが、ＲＢはエースの三重野大輔とＦＢに棚田九州男が、そしてＱＢには広瀬慶次郎がいました。主将は荒井正でした。これだけのタレントを生かさない手はない！　基本的には左右に開いたプロタイプですが、左右どちらかにＷＲを二人おくツインの体型も使ってパスを投げまくる作戦でした。二人のバックスは縦にならべてＩフォーメーションにすればＱＢは真っ直ぐ下がるだけでなく、右や左に少し流れて投げるのに好都合でした。三重野フェイクのパスもやれます。でも、それはみんな机上の作戦に過ぎません。

甲子園で試合が始まりました、野木がフラットゾーンでパスを受けるとサイドラインに沿って、そのままＴＤをしてくれました。次の攻撃はツインにして外のレシーバーはアウト、内側の安部井はコーナーへ。タッチダウン！　14対０です。ベンチで飛び上がって喜んでいる私に、ＴＤパスを投げて帰ってきた広瀬から「先生、試合はこれからですよ！」とたしなめられました。まさに、その後の試合は慶次郎の予言通りでした。最終のスコアは関学38対36明治。たまたま、関学がリードしている時に、タイムアップになっただけでした。

翌１９６９年は、私の長い大学教員生活のなかで最も苦しい年だったと思います。棚田九州男が４年生になってキャプテンでした。大学紛争のために授業もできず、研究室にも入れず、練習にも満足に顔も出せない、最悪な状態でした。あまり顔を出せなくても、時には選手とフットボールを語りあえることは、私にとって大きな幸せでした。しかし、甲子園ボウルでは日大の守備陣に翻弄されました。２度ゴール前まで攻め込みながら得点できなかったことは、攻撃のコーチとして「申し訳ありません」の一言です。

１９７０年はエースランナーの三重野キャプテンをはじめ、広瀬、野木、松村といったパスの関学を築き上げた選手たちの最終学年でした。コーチではありませんが、社会学部の宣教師のジョイス一家はサイレンのようなものを

持って甲子園ボウルへ応援に来て下さっていました。また、応援団のバトンのお嬢さんに数人のＯＢたちとお金を出し合って、ミズノでチアリーダーのユニフォームを作ってもらい、甲子園ボウルで応援してもらったことを想い出します。かけ声はジョイス夫人に指導していただきましたから、英語が多く、観客とチアリーダーが一体となるのが難しかったようです。でも、念願のチアリーダーの誕生でした。このお嬢さんの中の一人が、現在日本のバトンの総元締めをしている水野啓子さんです。甲子園ボウルでは関学34対6日大と前半で勝負が決まってしまいました。

１９７１年のシーズンはＯＢ会から休むように命じられました。多分、「怒鳴って叱って」一辺倒の私のコーチの仕方に対する批判があったのだろうと思います。また、コーチ以外のＯＢをグラウンドに寄せつけない私のやり方は、ＯＢたちから喜ばれなかったと思うのです。この1年間は米国留学で習ったことを講義に取り入れ、論文や本を書くにはありがたい「お休み」でした。

１９７２年は伊角富三キャプテンの年でした。選手層がぐんと薄くなりました。しかし、幸いなことに、高等部で松本秋夫コーチが育てた金の卵たちが大勢入学してきました。卵を雛にして試合に出さなければ人数が足りません。春の明治との試合に勝ちたい一心で、終戦直後アメリカ兵が先輩たちに教えてくれたフォワードパス・ラテラルを使って明治に勝ちました。その後、私は一度もこのプレーを使ったことがありません。このパスを見ると、当時の「貧乏」な時代を想い出すので嫌だったのでしょう。秋は若い選手たちが一戦ごとに力をつけてきました。しかし、甲子園での法政との対戦では、彼らのパワーとスピードに圧倒され、後半玉田→小川のパスで追いかけましたが、関学20対34法政という結果に終わりました。

１９７３年の甲子園ボウルは関学24対7日大というスコアで全国制覇を果たすことができました。しかし、これまでのように甲子園で関東代表に勝つという目標だけを見つめている時代は終わり、関西での優勝に全力を注がないといけない状況が到来しました。リーグ戦の最終日に京大に17対0と僅差で勝って、やっと甲子園ボウルに出場できました。関学にとっては甲子園ボウルへの出場は、実に大きなチャレンジになってきたのです。この年主将は豊島良夫でした。

１９７４年の京大戦も厳しいものでした。この頃から水野監督ひきいる京大は関学が使っていない三人のＲＢを擁するウイッシュボーン体型からのトリプルオプションを使

い始めました。私は攻撃担当のコーチでしたが、京大オプションを止めるには、自分たちもトリプルオプションを手がけなくてはならないと思いました。夏の合宿でオプションの上手なＱＢ西村英男とＦＢ村田安弘にトリプルの練習をさせました。コーチや上級生は「また、建ちゃんの臆病風が吹いている」と笑いました。しかし、秋になるとこの関学２軍のやるトリプルを１軍の守備は止めることができなくなり、対トリプルへの意識がすっかり変わり、その結果京大戦では苦戦しながらもなんとか止めることができたのです。甲子園では日大のパスに苦しみましたが、ＤＢ石田常雄の再三の好守備に助けられ関学28対20日大で逃げ切りました。主将は１年の時から攻守のラインで活躍してくれた小寺通嗣でした。

１９７５年は３年前の甲子園で法政に敗れた学年がもう最上級生になっていました。主将の前川比呂郎をはじめスーパー４年生たちです。しかし、京大戦では第１プレーの小川良一へのスクリーンパスが余りにもあっけない独走ＴＤになった油断か、次のキックオフを返されＴＤをされると、チームに焦りがでたのでしょう、ことごとく歯車が狂い、一時はどうなることかと心配しました。でも、最終的には24対14でやっと勝つことができました。甲子園ボウルでは、伊角富三コーチの発案でパスの玉野正樹とトリプルオプションの西村と２人のＱＢに異なる攻撃をさせました。オプションを予想していなかった明治に得点を重ねて、関学56対７明治という結果になりました。

１９７６年は大勢のスター選手が卒業した翌年です。主将は伊藤文治郎でした。リーグ戦の最終日、西宮球場でＱＢ宅田の率いる京大に０対21で完敗し、リーグ戦１４５連勝は止められてしまいました。幸い、その前節京大は関大に破れていたので、一週間後、万博陸上競技場で甲子園出場校決定のプレーオフになりました。それまでの一週間、私はスープ以外何も口にすることもできないほどの緊張状態が続きました。マスコミは全て京大が勝つことを願っているようでした。ところが、京大の選手が関学の練習をスパイしたことが分かり、風向きが一夜にして変わりました。試合当日観客たちの応援は明らかに関学びいきになっていました。この試合で、私は攻撃プレーの選択をアメリカ帰りの広瀬コーチにお願いしました。広瀬コーチは最上級生になったＱＢ西村英男や、志浦康之を筆頭とするレシーバー陣の特徴を生かしたパス攻撃を展開、伊角コーチの指揮する守備陣は京大の攻撃をシャットアウト。13対０で勝利し、甲子園に出場を果たしました。甲子園ボウルでは関

学29対22明治でした。

なお、シーズンのはじめから決めていたことですが、ヘッドコーチと監督を10年間させていただいた私は、今後関学チームを指揮する人はアメリカにフットボール留学をして本格的なコーチングを勉強した人でないと務まらない時代が来たと感じ、このシーズンをもって伊角富三コーチにバトンタッチしました。

現役時代、名もなき選手だった私が、10年間甲子園ボウルで勝つことができなかったファイターズのヘッドコーチや監督を務め、甲子園ボウルで7勝3敗という成績をあげたのは奇蹟のようなことでした。選手たちはもちろん、OBたちがコーチとして献身的に選手を指導し、私を助けて下さったお陰でした。また、「ケンは、怒鳴って、叱ってばかりいるが、彼にやらせておけば甲子園で勝てるから」と半分あきらめの境地で私を支えて下さったOBたちにお礼を申し上げたい。そして、フットボールの攻守について無知な私を本場アメリカの監督やコーチが助けてくれたことが、そして後の関学フットボールの指導者を育ててくれたことが、我々のチームにとって実に大きな力になっていると心から感謝しています。

マイク・ギディングス氏との出会い

今私のコーチ人生を振り返ると、1967年の春、実に大きな出会いがありました。厚木基地の体育局長から電話があり、ユタ大学の監督を講師に招き2日間の講習会を基地のなかで開くのだが、日本人コーチにも参加して貰いたい。そこで通訳をしてくれないかという依頼でした。通訳は別として私もぜひ参加したいとハリスさんと一緒に厚木まで行きました。2日間通訳をしていると結構講師と親しくなります。8月からデトロイトに行くと言ったら、ぜひユタ大学によって俺の家に泊まれと誘ってくれました。

その年のクリスマス前のことです。デトロイトの仮住まいでTVを見ていると、ユタ大学のマイク・ギディングス監督が解任されたと言うではありませんか。アメリカのスポーツ界ではありふれた話ですが、私が知っている唯一の監督がクビになってしまったのです。個人的には、困った、残念、どうしよう。そして、彼のことを思うと誠に気の毒です。でも、私にできることは、つたない英語でお見舞いの手紙を送ることぐらいでした。

翌年の夏が近づき、8月の中旬には帰国だな…と思っている時、マイクから手紙が来ました。「サンフランシスコ

49ers のコーチをしている。夏はサンタバーバラで合宿をしているから帰りに寄れ」と言ってくれました。彼が紹介してくれたホテルは超豪華ホテルで、ハリウッドのスターが泊まりにくるようなところです。夕方 49ers の合宿から帰ると、家族を連れてマックドナルドかケンタッキーでディナーでした。翌日、昼食時に監督コーチのテーブルでこの話をしたら、皆さん大喜び、大笑い。合宿中、コーチのテーブルの会話には選手たちは神経をとがらせています。何時、誰を、解雇するかを話しあっているかもしれない時だからです。合宿も見ました。オープン戦ではベンチに入れて貰いました。しかし、これはただのプロチーム見物でしかなく、あまりにも関学のフットボールとその置かれている現実とは違いすぎました。

１９６９年の春、マイクから手紙が来て、６月に 49ers のコーチがほぼ全員で厚木基地へ講習会の講師として行くとのことでした。マイクだけでなく、49ers のコーチ全員とはすごいことです。直ぐに返事を書きました。「講習会が終わったら関西に来て1週間後にある西宮ボウルで西軍の守備コーチをしてくれないか?」一銭も払えないが、ホテルと食費だけは全部持つという内容でした。また、彼から手紙が来ました。「どんな守備体型を使うのか?」という質問です。彼、やる気だな！　いろいろ考えましたが、「日本のフットボールはまだラン中心で、パスを投げるチームは関西学院だけ。ランを止めるには第1線と第2線の合計が8人の方がいいように思いました。そして同時に、関学には守備の第1線を守れるような大きなラインが少ないので、できれば6人とか5人でなく4人の守備ラインと4人のラインバッカーならば好都合だが」と書きました。

ギディングス氏はやる気満々です。新幹線で新大阪駅に着くとホテルに寄らずにそのままグラウンドへ行くと言って、早速4対4のシステムを説明し、守備のラインやラインバッカーに基本の動きと技術を教え始めました。相手は前年度関東リーグの覇者明治中心のチームです。練習後マイクは我が家で食事をすますと、8ミリのフィルムで明治の春の試合を次々にチェックして、簡略化した分析表を作り、そこに出た明治の攻め方の傾向をもとにして、ベンチから守備のサインを出すと言うのです。このオールスターには当時若手ＯＢも出場でき、関学の守備コーチの瀧は守備のキャプテンでもありました。ギディングスと瀧の両者はすっかり意気投合しているようでした。試合は関西の楽勝。試合後みんなでマイクの胴上げをしました。なお、この試合でのギディングス・コーチ活躍の様子をアメリカの

記者がサンフランシスコの新聞に写真つきで記事を書きました。関学ファイターズの名前と守備キャプテン瀧のことがアメリカの新聞に載ったのです！

このオールスター戦にマイクを招いたことは大きな意味をもちました。本場のコーチがどうやって未熟な日本選手を指導し、何も知らない武田というコーチとタッグを組み、相手の攻撃の分析の仕方とその対策、試合中のベンチのからのサインと選手の起用などなど、実に多くのことを教えてくれました。そして、その決定打は、瀧コーチと一緒に彼を伊丹空港まで送って行った時に、日大のアンバランス対策を尋ねたことでした。今はどうやって対応しているかという質問に、瀧と「日大の一人多いサイドに守備のラインもずれてセット、ラインバッカーも一人多いサイドに寄ります」と言ったとたんに、マイクから「待て」がかかった。「第1線が攻撃の一人多いサイドに寄ったら、第2線は少ないサイドに寄らないと危ない」と言うのでした。なるほど、我々は日大のラインが一人少ないサイドで進まれていることが多い。コロンブスの卵とはまさにこのことでした。

その後彼はデンバー・ブロンコスのコーチを最後に、コーチ業をやめて自分でＮＦＬつまりアメリカのプロフットボールの選手の能力を評価する会社を立ち上げ、プロの全選手をあらゆる角度から分析し、その評価表を彼と契約しているチームに売るという仕事を始めました。これが大成功し、彼は一躍大金持ちになりました。しかし、昔からの友情というのは嬉しいモノです。後に私が学長をしながら大学チームの手伝いをしていた時に、２度関学を尋ねてきて新しい攻撃を教えてくれ、関学の試合のビデオを彼のオフィスに送ると、丁寧な評価とサゼッションを送ってくれました。すべて友情による無料サービスです。彼を起点にして、私の米国の大学コーチとの交わりのネットワークはどんどん広がっていきました。

チャック・ミルズ

たしか１９７０年の夏前のことです。アメリカから一通の短い手書きの手紙がきました。差出人はユタ州立大学のチャック・ミルズと書いてありました。封を開けると、横須賀基地の講習会に行ったついでに、万博を見物しに大阪へ行った。しかし、余りの人の多さにびっくりして、一日滞在しただけで帰ってきてしまった。「関西へ行ったらぜひお前に会え」と言われていたのに、電話もしないで申し訳なかった。いつの日か、今監督をしているユタ州立大学

を日本に連れて行き、日本の大学選抜軍と試合をしたい」と書いてありました。

関西の一チームの監督やコーチが取りあげられる問題ではないので、すぐ関西連盟理事長の古川明さんに相談しました。「建ちゃん、これは絶対実現させたいね」という答えが返ってきました。古川さんの動きは慎重だが速い。すぐに東京の連盟と連絡をとり、東京もぜひやりたいという意向。今度は私がミルズ氏に手紙を書く番です。「日本側の準備はできつつある、そちらはどうか?」

後で聞くと、そんな簡単に返事がくるとは思ってもいなかったので、この手紙にミルズ氏はびっくりしたそうです。それも関西と関東の両連盟が乗り気になっており、「いつ来るのだ? どうせなら早く来い」と言われた感じだったそうです。彼は米国に進出している日本企業、日本に進出している米国企業にたくさん手紙を書いて援助を求めました。

ユタ州立大学日本遠征の話は着々として実現に向かいました。1971年夏、ミルズ夫妻が来阪。とにかくアメリカのメジャーカレッジの来日に関わる話し合いです。私は父に頼んで昼食の場所を大阪のある料亭に用意して貰いました。ミルズさんと親しくなってしまった今、どうしてあんな仰々しい場所を選んだのだろうかと思うのですが、当時はそのくらい大きな出来事だと私は考えたのでしょう。鎖国時代に黒船がやってきた時の幕府の役人の驚きように似ていたと苦笑しています。

私たち夫婦の役目は昼食をご馳走し、後は関西連盟の理事長の古川明さんにバトンタッチすることでした。大阪で全関西と試合する甲子園球場を見学し、宿舎になる新阪急ホテルを見てお二人は上京、私たちの役目は無事終了しました。一つ自慢話を紹介しましょう。私はチャックにこんなことを言ったようです。私たちは貴方のチームを大いに歓迎します。しかし、全米大学体育協会（NCAA）はユタ州立大学がシーズン後、国外へ遠征するのを必ずしも好まないでしょう。「秋のシーズン終了後、勝手に日本へ遠征し、NCAAが認めている試合数や練習日以上にフットボールをする機会を作ろうとしている」と言って、NCAAはこの計画にストップをかけるかもしれない。そんな時には、「ニクソン大統領に手紙を書け」と言ったそうです。半年後、羽田へ迎えに行った私にミルズ監督は盛んに手を振り、その手にあったのが、大統領から「ユタ州立大学が国際親善のために日本に行くことを許可しろ」という手紙でした。あの頭の固い全米体育協会も大統領には勝てな

かったようです。

徳永さんの奥様の実家は芦屋の豪邸である。お庭は公園のように広い。彼らの滞在中お宅を解放してクリスマス・パーティーを開いて下さいました。遠くアメリカを離れて日本に来た彼らにとって、忘れられない経験だったと思います。ミルズ監督はこんなスピーチをされました。「何年かしたら、試合の得点は忘れられるだろう。しかし、ここで結ばれた友情が永遠に続くことを願っている」と。

甲子園での親善試合で関西のＱＢは関学ＯＢの広瀬慶次郎でした。後半広瀬のパスをインターセプトしたのが、卒業と同時に横須賀基地のフットボール・コーチとして来日したケント・ベアでした。彼はその後、カリフォルニア大学バークレー校、アリゾナ州立大学、ノートルダム大学、ワシントン大学、そして今コロラド大学で助監督をしています。毎年、彼はアメリカの二つの大学のコーチと選手をつれて来阪し、７月はじめの日米の選手が混ざったオールスター戦を助けてくれています。そして、ミルズ監督のもとでは、広瀬慶次郎、伊角富三、鳥内秀晃らが数年ずつコーチの見習いをさせてもらいお世話になりました。

日本の大学フットボールの年間最優秀選手に贈るチャック・ミルズ杯はミルズ監督と交わった関学を中心とする多くのフットボール人との友情のなかから生まれたものです。現在、彼が日本に最も近いアメリカであるハワイに住むようになったのは、関学ＯＢ鈴木智之のすすめがあったからです。今関学コーチ陣の中心である大村和輝がハワイ大学へフットボール留学できたのも、ミルズ氏が紹介したお陰です。奥様のバーバラさんは亡くなられましたが、そのお骨は関学の近くにある満池谷の武田家の墓に眠っています。

チャックはユタ州立大学の後、ウェイクフォーレスト大学、南オレゴン大学、沿岸警備隊士官学校の監督や体育局長を歴任、現在はリタイアしていますが、彼がコーチした全ての大学の元選手やコーチを含む大きなネットワークを作り、絶えずお互いの間の情報を交換し、定期的に集まり、学校やチームを越えた交流をはかっています。

その昔、我が家にきた一通の短い手紙。もしあの時、少しの時間と手間を惜しんで、返事を出すのを怠たっていたら、戦後初のアメリカ大学チーム日本遠征も、関学ＯＢたちのフットボール留学もなかったことだろう。あの手紙に返事を出して本当に良かったと、今しみじみ感じるのです。

ジャック・カーティス監督

１９７２年のことだったと思う。我が家にアメリカから、また一通の手紙が舞い込みました。なんと差出人はジャック・カーティスと書いてあります。私が留学からの帰りに持ち帰ったフットボールの虎の巻ナンバーワンがスタンフォード大学監督当時に彼が書いたパス攻撃の本でした。私のコーチングにもっとも影響を与えた本の著者からです。嬉しさを通り越して緊張が走りました。

数週間後、親愛なるカミさんと二人で、昔の羽田空港の出口に立っていました。もちろん初対面。写真ではお顔を知っていましたが、うまく会えるだろうか？　なんとかお二人を昔の東京ヒルトンまでエスコートしました。お疲れだろうと思って失礼しようとする我々に、夕食を一緒にしようとのお招きです。とにかく、イエス・サー、ノー・サーと精一杯の敬語を使いました。後に、彼は選手たちに卒業後社会に出たら「イエス・サー、ノー・サー」と敬語を使い、清潔なハンカチを持っていれば社会でやっていけると説いたということを知り、ほっとしました。

数日後、カーティス監督は関学のグラウンドに立っていた。彼のＱＢ指導が始まりました。１９６２年に米国から帰国する時に買って帰ってきた本にでてくるパス攻撃を手取り足取り教えていただけるのです。監督の講義や説明を通訳しながら、夢ではないかと何度も思いました。パスのルートは本で知っていました。しかし、細部にわたって著者から手取り足取り教えていただくのと、読むのとでは大きな違いがありました。実際に監督が動いて見せて下さり、良かったら誉め、悪かったらそれを指摘してもう一度注意すべきところをやらせる、これがコーチングの見本だと思いました。カーティス監督に教えていただくまでは、関学のＱＢは右や左に流れても、そこで止まってボールを投げていました。それで、カーティス監督はネットに向かって全速力で走りながらボールを投げる練習を紹介して下さいました。ボールがどこに行くかは気にしない。これは「全速力で走っても、全力でボールを投げることができる」ということを体験するだけの練習だと言って教えて下さったのです。関学のＱＢは今でもこの走って投げる基本練習を続けています。また、現在関学が多用しているシャベルパスは、カーティス監督がスタンフォード大学の前任校であるユタ大学時代に考案したプレーです。ですから、別名ユタ・パスと呼ばれています。

カーティスご夫妻はカリフォルニアのサンタバーバラに

住んでおられました。この街はシスコとロスの間です。私が米国の東部や中西部に勉強に行く時には、必ず先生のお宅に泊めていただく間柄になりました。コーチの大会に出席すると必ず多くのアメリカ人のコーチに紹介をして下さいました。それが、その後の私のコーチ人生でどれだけ情報の増加になったことでしょう。

１９７３年の夏、私はフィラデルフィアのテンプル大学で、行動療法の世界的権威者であるウォルピのもとで勉強していました。そこへカーティス監督から電話があり、テキサスのラボックで今春大学を卒業し、これからプロに行く選手を集めてオールスターの試合をするから出てこいというお誘いがありました。ここには全米から有名コーチが集まります。私にとっては試合よりも、彼らと親しくなれることの方が重要です。急遽テキサスまで飛びました。大会本部になっているホテルには東西チームの監督やコーチだけでなく、大会の役員をするビッグネームのコーチが大勢泊まっていました。先に紹介したノートルダム大学のパーシグエン監督からウイングＴの話を聞いたのも、このホテルのプールサイドでした。

この年、東軍の監督はピッツバーグ大学のジョニー・メイジャース、西軍の監督はオクラホマ大学のバリー・スイッツァー監督でした。ともに大学フットボールを代表する大物です。カーティス監督は「ジョン、お前は東軍で午前中の練習だから、練習に行く時にケンをつれて行け」「バリー、お前は午後の練習だから、帰りにケンを連れて帰ってこいよ。ケンは日本の俺の息子だから、大切に扱えよ」というお達しです。翌日から、両者は交代で私を練習に連れて行き、連れて帰ってくれました。

メイジャース監督とは気があったのでしょう、親しくなりました。二人で彼のチームのエースランナーを私が毎週解説をしている神戸のＵＨＦサンＴＶの「カレッジフットボール」で取りあげようとしましたが、放送権の問題で実現できなかったことは残念でした。その翌年だったと思います。メイジャース監督から手紙が来て、奥さんと京都へ行くから久しぶりに会おうということでした。ジョージア大学のヴィンス・ドゥリー監督ご夫妻も一緒だということです。サンＴＶのカレッジフットボールの番組はまだ続いていました。両チームの試合も時々解説しており、私は彼らのやっている攻撃のシステムについて沢山の質問をノートに書いて持って行きました。午後６時頃から始めた夕食はとっくに食べ終わっていましたが、店が閉まるまで私の質問は続きました。その間、親愛なるカミさんは両監督夫

人を釘づけにして置いてくれました。なお、この二人は翌年のお正月にシュガーボウルで全米一をかけて戦うことになり、ジョージア大学が王座に就きました。その頃、私が送ったクリスマスの手紙への返事が来て、「京都で君とメイジャースと三人で話しあった時には、まさか彼のチームとシュガーボウルで試合をするとは思いもしなかった」と書いてありました。

その頃日本経済はバブルの絶頂期でした。東京では毎年お正月にアメリカのカレッジ・オールスター戦を開いていました。この二人の監督は毎年交代でやっているかのように、東軍の監督として東京にきました。もう一人カーティス監督から紹介していただいたのが、ユタ州にあるＢＹＵのラベル・エドワード監督でした。この三人を知っていれば、毎年ジャパンボウルの時に宿舎の高輪プリンスホテルに行って、彼らのアシスタン・コーチ（と言っても有名大学の監督です）を紹介してもらい、その時々に私が抱えている疑問や質問をぶつける機会を与えてもらいました。このことが私にとってフットボールを学ぶ絶好の機会になりました。現在、関学チームのディレクターをしている小野宏コーチが大学を卒業してアメリカへパス攻撃の勉強に行く先を探している時、ＢＹＵのエドワード監督に直接電話をしてすぐにＯＫを貰ったのも、その糸をたぐって行くとカーティス監督にたどり着くのでした。

３人のコーチと交換したそれぞれ一通の手紙。その一つひとつが、関学のフットボール、いや日本のフットボールにとって大きな意味をもたらしたと思います。関学フットボールの80年の歴史を紐解く時、単に上ケ原でフットボールをコーチしプレーした経験だけでなく、そこには海外からの多くの指導や援助があったことを感謝せずにはいられません。１２５年前にランバス先生が神戸の原田の森に蒔いた種は、芽生え、育って関西学院という大きな木となりました。その小枝であったアメリカンフットボール部も、今では大きな枝に成長できたことに心から感謝しています。

「怒鳴って、叱って」から「誉めて教える」

大学のヘッドコーチと監督時代を振り返ってみると、怒鳴って、叱って、狂気になってコーチした10年間でした。私の悪口雑言を選手諸君はよく耐えてくれたと悔悟とともに感謝しています。そして、１９７６年の甲子園ボウルが終わったら、勝っても負けても、伊角コーチにバトンタッチをしようと思っていました。

翌１９７７年の夏、私はフルブライト招聘客員研究員としてミシガン大学に行きました。子どもの行動を変えるのに、心理学をどう応用するかを習って上ケ原へ帰ってきました。

私は新しく勉強した子育ての指導方法を神戸市児童相談所を中心に普及させたいという夢を持っていました。関学の福祉出身の小前千春所長とその夢を語り合い、毎月勉強会を開いていました。そんな時に、大学チームの伊角コーチが尋ねてきて、関学高等部のチームが弱くなってきたから、そこを立て直せと言うのです。自分はアメリカで勉強した「子育ての理論と方法を」と言ったのですが、結果は高等部監督ということになりました。

またフットボールのコーチをするならば、新しくミシガン大学で学んだ子育ての理論と方法をコーチングに応用してみようと思ったのです。怒鳴るコーチングから誉めるコーチングへの転換です。これは私にとってはそんなにやさしいことではありませんでした。前の年まで10数年間怒鳴って、叱って、ボロかすに言っていた人間が、急に誉めるようになるのですから、いくら理論的にはそれが良いと思っていても、なかなかできるものではありません。時には歯を食いしばって誉めることもありました。

私は叱ったらいけないとは言いません。叱ることも大切です。でも、ただ「駄目じゃないか」「なんだ、そのやり方は」「ボールを落とすな」と叱るだけでは、選手は上手になりません。どうすればいいのかを言ってやり、見せてやり、ちょっとでもできたらそれを誉める、まだできなくても努力していたら、「努力しているのはわかるよ」「良くなってきたよ」と言ってあげることが大切だと心から思うようになりました。ミシガン大学で偉大な洗脳を受けたわけです。

特に今回は高校生のコーチです。大学時代の怒鳴る指導では高校生はついてこなかったでしょう。初めのうちは誉めるのがぎこちなかった私も、少しずつ誉めることができるようになりました。８年間の高等部の監督時代の成績は６回の全国優勝と２回の準優勝でした。大学時代は怒鳴って叱って甲子園で７勝３敗ですから、勝率はあまり変わらないと思います。しかし、誉めることを重視し、叱る時には、どこが悪いのか、どうして欲しいかを言って、やれたら誉める方が、上達が早いように思います。現在、私は大学チームで新人選手がボールを捕るのを教えていますが、できるだけできたところを誉めるコーチングを心がけ、悪いところは指摘して、どうやって欲しいかを言い、それをやれた

ら「できたね！」と伝えるようにしています。選手たちは機嫌良く、やる気をだして、ボールを追いかけています。こんな簡単なことですが、それを実行するまでには、長い時間がかかりました。現在の大学チームの全コーチが私のやり方に賛成しているとは申しません。しかし、チームの雰囲気は大昔私が監督をしていた時の、とげとげしい状態とは全く違います。監督とコーチが一人ひとりの選手のことをよく観察し、彼らの成長を励ましているという雰囲気がグラウンド一杯に広がっています。子どもは親の真似をし、生徒は先生の真似をして育ちます。良いところも悪いところもです。やがて、選手たちが上ケ原のキャンパスを巣立って社会人になった時、彼らは自分たちがグラウンドの上で教えられたように部下を教え、自分たちが扱われたように他者を扱うようになると思います。

※この講演の文章化にあたっては、学院史編纂室の川崎啓一氏に大変お世話になりました。心からお礼を申し上げます。

2014 年 6 月 12 日

第 40 回 学院史研究会　レジュメ

関学アメリカンフットボールと私

武 田　建

① 1934（昭和９）年、立教大学の宣教師ポール・ラッシュとジョージ・マーシャルが早稲田、明治、立教で学んでいたアメリカ国籍を持つ日系二世学生に呼びかけ、秋には合同練習を開始。11 月 29 日、神宮外苑競技場で東京学生連合軍と横浜外人チームが試合をした。学生選抜チームが 26 － 0 で勝利。

② 同年 11 月 1 日、東京学生アメリカンフットボール連盟発足。

③ 1935（昭和 10）年、ＵＳＣを中心に太平洋沿岸大学の合同チームが来日。ＵＳＣ対選抜軍の 12 試合をおこなった。対明治大学は 71 － 7、対全日本大学は 73 － 6。

④ 関西大学では 1935（昭和 10）年からチームを結成、1938（昭和 13）年に法政大学を 55 － 8 で破る。

⑤ 1940（昭和 15）年、同志社大学がチーム結成。関西大学リーグ開始。

⑥ アメリカンフットボールを鎧球と呼ぶ。

⑦ 1941（昭和 16）年２月、関西学院大学にアメリカンフットボール部結成。同年 12 月８日、太平洋戦争始まる。

⑧ 仁川の川原で、関西大学に指導を受けて練習を始めた。攻撃はシングル・ウイングバック・フォーメーションを使う。

⑨ 1940（昭和 15）年５月 25 日、対同志社大学が初戦。20 ― 0 で敗れる。

⑩ その後太平洋戦争で中断。

⑪ 1945（昭和 20）年、終戦の秋に軍隊から帰ってきた学生がチームを再建。

⑫ 1947（昭和 22）年、第１回甲子園ボウル。慶応対同志社。２世選手をもつ慶応

の圧勝 45 － 0。

⑬ 同年秋、関学チームが本格化。戦争帰りの松本主将。グラウンドでは怖いが、温かい人柄。下級生を殴る文化は全くないチーム。

⑭ 1946（昭和 21）年､関大が関西リーグ優勝。甲子園ボウルで明治を 0 － 6 で破る。

⑮ 関学に新制中学部誕生。中央芝生で練習する大学のフットボールを見にきた中学部１年生が、中学部にタッチフットボールのグループをつくる。やがて、関学の黄金時代をつくる選手に育つ。Ｊ３だったポーター先生のバックアップ、米田先生の指導。

⑯ 1949（昭和 24）年、関西学院大学リーグ戦初優勝、甲子園ボウル初出場。関学 25 － 7 慶応。
Fight on の歌、高等部、大学でフットボール。大学院時代に中学部コーチ。大学選手時代、武田は当時高等部３年生。高等部３年は大学リーグ戦、甲子園ボウル、ライスボウル（東西大学オールスター戦）にも出場。

⑰ 1950（昭和 25）年、米田満主将、甲子園ボウル慶応に 20 － 6 で勝利。

⑱ 1949（昭和 24）年から 1956（昭和 31）年の８年間に６回大学日本一。

⑲ 米田満先生：選手、主将、コーチ、監督の功績大。神戸新聞→関学高等部→大学→名誉教授。

⑳ この間甲子園ボウルでの２敗はいずれも対立教。オークス監督（宣教師）のノートルダムＴ。関学もＴフォーメーションをやろう。丸善で米国の本を輸入できるようになる前、フットボールをアメリカ文化センターの図書室で勉強。古川さんがＴフォーメーションの本。

㉑ 1961（昭和 32）年から長い暗黒時代。
関西で勝てても、甲子園では勝てない 10 年間。
甲子園で日大に８敗、立教に１敗１分。
この間６年半カナダ・アメリカ留学。試合を見るだけ。
総合試験と論文をほぼ同時に受ける。
論文試験がおわり、大学の書籍部でアメリカンフットボールの本を全部買いあさる。
スタンフォード大学のパス攻撃の本。

㉒ 1962（昭和 37）年、武田帰国。日大 28 － 24 関学。プロＴ導入。

㉓ 1966（昭和 41）年、徳永監督。武田がヘッドコーチ。日大 40 ― 12 関学。
ライスボウル　関西 34 － 30 関東。　全日本対博多のアメリカ軍。日大の底力。

㉔ 1967（昭和 42）年、関学 31 － 12 日大。（夏合宿以後　武田は２度目の留学中）

㉕ 成功の陰には多くのアメリカ人コーチの助け。
宣教師トム・ハリス　　商学部宣教師　エブリデイ・プラクティス。
マイク・ギディングス　　ユタ大学監督　SF49ers
Pro Scout Inc. 社長（NFL 選手の評価会社）　私の相談相手であり、友人、師匠。
ジャック・カーティス　　スタンフォード大元監督　「パスの関学」の恩人。
私のフットボールの父、MSU で買った本の著者。
チャック・ミルズ監督（USU）　　一通の短い手紙　→　返事。日本は OK。
ユタ州立大　ウェイクフォーレスト大　南オレゴン大コーストガード士官学校
監督した全てのチームをつれて来日。
広瀬慶次郎、伊角富三、鳥内秀晃氏らの留学。関学フットボールの恩人。
チャック・ミルズ杯
もしあのとき返事をしてなかったら？
関学の、日本のフットボールは別の道をたどっていた。

㉖ 1966 年― 1970 年、1971 年― 1976 年　ヘッドコーチ＝監督
1976 年、京大に敗れる。甲子園ボウル出場決定戦に 13 － 0 で勝利。
甲子園ボウル７勝３敗。伊角監督にバトンタッチ。
シーズン前から最後年と考えていた：大学教員をしながら大学の監督、難しい。
専攻が二つあるようなもの。福祉・心理、フットボール　ＪＬ　と　専門書。

㉗ なんとか教員とコーチの両立
自分の専攻領域のテーマについて米国で世界のトップの先生について学ぶ。
カウンセリングの臨床訓練。２回にわたり計２年間
→エイロン・ラトリッジ
　ジョゼフ・ウォルピ
　エドウイン・トーマス
フットボールから足を洗って、フルブライト客員研究員としてミシガン大学で
１年間勉強。　行動アプローチの勉強。帰国後、神戸市児童相談所。
子育ての心理学をコーチングに応用。
関西福祉科学大学・宝塚児童館・関西学院同窓会・神戸家庭養護促進協会で子育て勉強会
高等部の監督として８年間に６回全日本高校選手権大会優勝。
怒鳴って叱って７勝３敗　ｖｓ　誉めて指導６勝２敗

㉘ 関西学院大学アメリカンフットボールの攻撃

シングルウイングバック
Ｔフォーメーション
ノートルダムＴ
Ｔの変形
プロＴ　1962年
ウイングＴ
シングルバック　２WR　２TE
Ｉフォーメーション
ウイッシュボーンＴ（京大のスカウトオフェンス）
ダブルウィング
ラン＆シュート　小野宏ディレクターとハワイ大学でコーチングを学んだ大村コーチ
強いチームを作るには「良い選手、良い設備、良いコーチ」
スポーツ推薦
専用グラウンド　トレーニングセンターの必要性
職員コーチの存在が大きい　専任コーチの必要性

㉙ 強いフットボールチームを作るには
良い選手のレクルーティング。KGHと啓明。スポーツ推薦。
良い設備　良いグラウンドだが１面しかない。
私はサイドラインの外で練習を指導。
良いコーチ　専任（プロコーチ／Ｘリーグの引き抜きが心配）職員コーチ。
関西学院に感謝。しかし連覇するにはさらなる環境。
週日は練習にならない。５時半には少数の選手。授業が終わり６時半～７時でないと選手がそろわない。基本練習の時間がない。練習時間は８時まで。
米国では選手に履修時間の変更、履修の優先。日本では難しい⁉

㉚ サンＴＶの米国カッレッジフットボールと関学フットボール。